音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発
－能の授業デザインと題材を貫く問いの設定－

地域教育支援部　研究主事兼指導主事　浅井　ちとせ

要約

平成29年に中学校学習指導要領、平成30年に高等学校学習指導要領がそれぞれ告示され、教育課程で音楽を学ぶ意義について「生活や社会の中の音（芸術科音楽Ⅲ：多様な音）や音楽、音楽文化と豊かに（芸術科音楽Ⅰ：幅広く/音楽Ⅱ、Ⅲ：深く）関わる資質・能力の育成」として教科及び科目の目標に明記された。この資質・能力の育成のため、音楽科授業におけるパフォーマンス課題を当センター講座で示したいと考え、令和２年度に上記研究テーマを設定し、今年度は副題を「能の授業デザインと題材を貫く問いの設定」とした。今年度当センター講座の中高音楽「能の連吟を楽しもう・お囃子を創ろう」講座において、昨年度の中高音楽「能の節を謡ってみよう＆タブレットでお囃子を創ろう」講座に仕舞の実技と授業デザイン演習を加えて講座を実施した。２年間の受講報告書とFormsアンケートの回答を比較しながら、今年度講座の成果と課題を見出し、能を教材とする効果的な題材構成及び我が国の伝統音楽の理解を深めるための他教科をつなぐカリキュラム・マネジメント例も提示したいと考えた。

キーワード：学習指導要領音楽科の目標が示す資質・能力の具現化
謡と仕舞の関連
能を教材とした授業デザイン
我が国の伝統音楽をつなぐカリキュラム・マネジメント

１　研究の背景

中学校学習指導要領音楽編及び高等学校学習指導要領芸術編音楽Ⅰ～Ⅲの各目標に示された「生活や社会の中の音（芸術音楽Ⅲ：多様な音）や音楽、音楽文化と豊かに（音楽Ⅰ：幅広く/音楽Ⅱ・Ⅲ：深く)関わる資質・能力の育成」を具現化するため「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発」をテーマとして令和２年度から研究を続けている。教育課程で音楽を学ぶ意義について、中学校学習指導要領音楽編では「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」、高等学校芸術科音楽Ⅰでは「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力の育成」と各目標に示されている。この資質・能力について、中学校学習指導要領解説書（p.11～12）で次のように示されている。

“生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することは、生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる。生活や社会の中の音や音楽、音楽文化との関わり方には、歌う、楽器を演奏する、音楽をつくる、聴くなど様々な形があるが、そのいずれもが音や音楽、音楽文化を知り、支えることとなり、生活の中の音や音楽の働きを自覚し、音楽文化を継承、発展、創造することに

つながる。（中略）また、グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできるようになることも大切である。”（以上、中学校学習指導要領解説書（p.11～12）より引用）

上記に示されているように、音楽を学習することが音楽文化を継承、発展、創造する資質・能力を育み、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできる資質・能力につながると考え、本研究において我が国の伝統音楽を教材とするパフォーマンス課題を昨年度に続いて作成し、能を教材とする授業デザイン及び伝統音楽の教科横断的なカリキュラム・マネジメント例を示したいと考えた。

２　今年度の講座策定の改善点

(1) 謡と仕舞を関連させた実技

世阿弥の伝書中で最も執筆が長期にわたる能楽理論書の「花鏡（かきょう）」（日本思想体系24「世阿彌禅竹」岩波書店）第六条〔舞声為根（舞は声を根と為す）〕において「舞は、音声（おんじょう）より出でずば感あるべからず。一声（いっせい）の匂いより、舞へ移る堺にて、妙力あるべし。又、舞おさむる所も、音感へおさまる位あり。」（p86）と記し、舞が音声（謡や楽器の伴奏）に基づいていなくては感動を生み出し得ないことや謡と舞を一体とすることの大切さを説いている。当センター講座の能の実技講座では、中学校音楽教科書２社（教育芸術社、教育出版社）に掲載されている「敦盛」と「羽衣」を教材として、令和４年度から謡を中心とした実技講座を実施してきたが、今年度講座で初めて仕舞を加えて実施した。

一般的な音楽の授業で、児童生徒が初めて出会う歌の旋律や歌詞を覚える際は、聴覚情報に加えて、視覚情報として紙媒体での教科書やデジタル教科書あるいは電子黒板やスクリーン上の五線紙で記された楽譜と歌詞等によることが多い。

一方、能を含む我が国の伝統音楽は、明治時代に音楽取調掛が西洋音楽を取り入れるまでほぼ縦譜や口唱歌による口伝で伝承されてきた。現代では我が国の伝統音楽も採譜によって西洋楽譜に書き換えられて出版されているものも多く、小学校６年生の音楽の教科書では、歌唱共通教材の「越天楽今様」（慈鎮和尚作歌/日本古謡）も西洋楽譜の五線紙によって四分の四拍子で記されている。しかし、能の謡は、明治初期の西洋音楽の学校教育への導入に伴って謡の音階の中心的な上音・中音・下音を中心とする横書き三線譜への改良が試みられたが、西洋楽譜の五線紙で出版されている謡の楽譜はほとんどなく、現代でも謡の詞章と直シといわれる旋律の細則を表す符号（ゴマ、増節、上、下、クル、入、ヲ、オ等）が細かく記された謡本を手掛かりとした謡の稽古が一般的である。また仕舞の手掛かりの指南書として、“仕舞を舞うときには、謡に所作（動作・型）の名称や舞台上での位置等が書いてある「仕舞形付」という本を用いて仕舞の稽古を行う”と観世流能楽師・野村四郎は著書で記している。（2010 野村四郎著「仕舞入門講座」p.18）

中学校音楽の教科書で取り扱う謡は、「敦盛」が２社（教育芸術社「中学生の音楽２・３下」、令和７年度版の教育出版「中学音楽２・３上音楽のおくりもの」）、「羽衣」が１社（教育出版「中学音楽２・３上音楽のおくりもの」）である。両教科書共に謡を謡う体験をねらいとした内容を提示している。教育芸術社は「声や音楽の特徴を生かして謡を謡おう。」

と目標を示して「敦盛」の「一門みなみな～遥かに延びたもう」の謡部分を取り扱い、観世流能楽師・清水寛二氏の採譜によって図形譜（教科書p48では「絵譜」と記載）で抑揚等を記している。教育出版は「能の音楽を体験しよう」と目標を示して「羽衣」の「東遊びのかずかずに」の謡部分を取り扱い、観世流能楽師・小早川修氏の採譜によって、謡の抑揚と囃子を担当する打楽器の大鼓、小鼓、太鼓（右バチ、左バチ）のリズムを６段の図形譜（教科書p62、63）で示している。このように謡や囃子の実技の際に生徒が謡いやすく、囃子の打楽器のリズムを捉えやすいよう、視覚支援の工夫がなされている。

一方、両教科書共に仕舞に関する記述は少なく、以下の通りである。

教育芸術社は「舞の音楽」（p.47）の項目で“能の演目の多くは、シテの舞が見どころの一つとなっています。舞は登場人物の思いが高まった場面で舞われることが多く、「敦盛」では、敦盛の亡霊（後シテ）が、合戦前夜の酒宴で舞った舞を思い出して舞う設定になっています。”及び「『中の舞』に挑戦しよう」（p.50）において“『中の舞』は『敦盛』の中で行われる、能の舞の中で最も基本的な、中くらいの速さの舞です。演奏をまねて笛（能管）の『唱歌（しょうが）』を歌ったり、大鼓や小鼓の『手（リズムパターン）』を打ったりして、舞の音楽を体験しましょう。”のように、仕舞の実技に関する記述はなく、仕舞の解説及び仕舞に付随する囃子の「唱歌」や器楽演奏等の音楽について記されている。

教育出版では、能「羽衣」のキリから「東遊びの数々に～」部分の鑑賞において、目標を「音楽の特徴と舞台の表現との関連に着目しながら鑑賞しよう」（p.59）と記し、同ページの「あらすじ」で、“羽衣を身につけた天人は、小鼓と大鼓と笛の音にのって舞い始め、後半はそれに太鼓が加わります。太鼓のリズムが舞とともに少しずつ速くなり、曲が盛り上がるクライマックスとなります。”のように仕舞について音楽表現と共に記している。

両教科書共、能の定義において能の音楽と舞踊との関連について記述しているが、音楽と仕舞を一体化させて実技等を示すコンテンツはない。

本講座の仕舞の実技では、教科書掲載の謡を繰り返し練習した後、能楽師が謡いながら舞う所作に合わせて、受講者も扇を右手に持って能楽師の所作に合わせて謡いながら仕舞を舞った。この仕舞の実技の際に、能楽師から各詞章と各所作との関連について説明があったので、仕舞体験によって詞章の意味が受講者に実感を伴って理解されたことが受講報告書の実習Ⅱ、実習Ⅲの気付きや感想部分（以下に記載）から確認することができた。このことから、謡いながら舞うことによって詞章と仕舞との関連に気付きやすくなり、能の表現の深い理解につながると考えた。

※ 受講報告書の実技Ⅱ、実技Ⅲの謡と仕舞の関連に関する記述
- 授業では動画を見ることでの指導が多いが、実際に舞ってみると、リズムや動き、感情等が理解しやすくなると思った
- 謡と舞と両方やって音楽を体で感じることこそ能のおもしろさなのかもしれない
- 歌と合わせて先生が舞ってくださったので、舞と歌の関係がとてもよく分かったので、大変よかった
- 実習Ⅱの内容を深めながら謡や仕舞の微細な変化や違いを感じ取ることができた
- 演者によって演目の解釈に違いがあったり、舞に違いが出るところに伝統文化としての深みがあると考えられる

（2）能を教材とした音楽科授業デザイン演習

昨年度の研究紀要のまとめとして、能を学ぶ授業担当者や生徒が能への興味・関心をもち、理解を深めるためには、実技のみならず、能を「歌舞伎」や「義太夫節」等の他の伝統音楽及び民謡を含む他の伝統的な歌唱等と比較・関連させることによって、能が社会に果たした役割や現代まで継承されている意義を考えることが必要と考え、今年度の講座では能を教材とする題材構成を受講者が協働的に話し合う演習を加える内容を企画した。

また、今年度講座では授業デザイン演習の前に、中学校学習指導要領音楽編及び芸術（音楽）編が示す〔共通事項〕を要として、生徒の実態に沿った柔軟な発想で授業構想できるよう以下の３つの授業デザイン例をスライドで映写して提案した。

ア　体を動かすことが得意な生徒

(ｱ) 題材名「伝統音楽に親しもう」

(ｲ) 授業のねらい　伝統音楽の歌詞やリズムと身体表現の関連性を理解する

(ｳ) 生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：リズム、歌詞

(ｴ) 授業内容　足拍子で拍子を取って仕舞を舞う活動を通して、能「敦盛」の地謡と仕舞の関連を理解する（知識）

イ　音楽を奏でることが得意な生徒

(ｱ) 題材名「伝統音楽に親しもう」

(ｲ) 授業のねらい　敦盛が吹いた「青葉の笛」の音色や旋律をイメージし、旋律を創る

(ｳ) 生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：旋律、音色

(ｴ) 授業内容　能「敦盛」の「青葉の笛」の旋律や音色をイメージし、思いや意図をもって旋律を創作しリコーダーで吹く（思考力、判断力、表現力等）

ウ　歌うことが得意な生徒

(ｱ) 題材名「伝統音楽に親しもう」

(ｲ) 授業のねらい　能「敦盛」の地歌「一門皆々　船に浮かめば」を謡って我が国の伝統的な歌唱の特徴を理解する

(ｳ) 生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：声の音色（発声）

(ｴ) 授業内容　能「敦盛」の謡の実技を通して、声の音色や曲種に応じた発声など、我が国の伝統的な歌唱の特徴を理解する（知識）

今年度講座の演習で上記の授業デザイン例を提案した後に、受講者はペアで題材構成を話し合い、アイデアを順に発表した。この活動後に他グループと互いのデザインシートを交換し合う姿が見られ、受講報告書からも当演習の活用意欲を確認することができた。

３　当センターの能楽講座の昨年度と今年度の概要及びアンケート結果の比較について

昨年度は当センター講座で中高音楽「能の節を謡ってみよう＆タブレットでお囃子を創ろう」講座を実施し、研究紀要にその成果と課題をまとめた。さらに昨年度の課題を基に、内容を再考して仕舞と授業デザインを加えて、今年度の中高音楽「能の連吟を楽しもう・お囃子を創ろう」講座を企画し、講座後に昨年度と同じ項目でFormsアンケートを実施した。

(1) 令和５年度中高音楽「能の節を謡ってみよう＆タブレットでお囃子を創ろう」講座の概要

①日時：令和５年８月17日（木）13時30分～17時00分

②会場：京都府総合教育センター北部研修所　音楽実習室

③講座のねらい：能「敦盛」と「羽衣」の謡の実技とタブレット端末での囃子創作を通して能楽の理解を深め、能の学習を通して育む資質・能力を考える。

④講師：能楽師　水上優氏（東京藝術大学音楽学部邦楽科准教授）

⑤受講者：20名(小学校１名、中学校15名、高等学校４名)

⑥研修内容

ア　講義・実習Ⅰ「能『敦盛』と『羽衣』を謡ってみよう」

内容：能「敦盛」「羽衣」の謡の実技（宝生流）

イ　実習Ⅱ　「タブレットで能のお囃子を創ろう」

内容：タブレットを活用した能「敦盛」「羽衣」の囃子の創作

ウ　実習Ⅲ　「連吟の楽しみを感受しよう」

内容：タブレットの囃子音源を伴奏とした能「敦盛」と「羽衣」のグループ別連吟発表

⑦受講報告書及びアンケート分析

ア　受講報告書（20名：小学校１名、中学校15名、高等学校４名）

(ｱ) 受講報告書の活用リード文

３　本講座内容のうち、今後の教育実践に役立てたり、勤務校で広めたりしようと思うことを記入してください。

(ｲ) 受講報告書のテキストマイニング

マイニングソフト（UserLocal AIテキストマイニング・スコア順）

(ｳ) 出現内訳

㋐タブレット、iPadに関する記述　８件

・タブレットと日本の伝統芸能を共に授業内で取り扱う

・タブレットを様々な形で活用してみたい

・タブレットを使った授業が当たり前の学校

・タブレットで音を重ねて伴奏のようにして発表する

・タブレットで今日やったことをやってみたい

・タブレットは授業の中で使う場面も増えてきた

・日本の伝統音楽を扱う学習でタブレットを使って身近に音や音楽を感じられる

・iPadの活用の幅を広げる

㋑日本の伝統芸能や伝統音楽に関する記述　６件

・日本の伝統芸能の奥深さや素晴らしさを感じることができる

・タブレットと日本の伝統芸能を共に授業内で取り扱う

・生徒たちが興味をもって日本の伝統芸能に触れ、感受していける

・日本の伝統芸能である能をどのように授業に取り入れていくか

・創る段階から楽しかったので、伝統音楽を少しでも身近に感じられるようにした

い

・日本の伝統音楽を扱う学習でタブレットを使って身近に音や音楽を感じられる

㋒工夫に関する記述　５件

・感受していけるよう工夫したい

・授業を工夫してつくっていきたい

・節回し等を工夫すると能らしく聞こえてきた

・能の謡や囃子を身近に感じて、親しむための工夫を学ぶ

・知覚したことを深める工夫を考えたい

㋓鑑賞に関する記述　４件

・能の内容や鑑賞を学習するだけでなく、謡を体験することは、能についてより深く親しむことができると思った

・授業でも鑑賞したり、歴史を学ぶだけでなく、実技も取り入れていきたい

・鑑賞だけではなくて、実際に謡うこと、創ることを授業の中に取り入れていきたい

・能のセリフやストーリーに興味がもてるようになり、より良い鑑賞にもつながる

㋔GarageBandに関する記述　３件

・GarageBandを有効に活用できる

・GarageBandなど音楽活動、表現の場ではなかなかうまく活用できていない

・講義Ⅱで習ったGarageBandを使用してみよう

イ　令和５年度　Formsアンケート(回答16名)

(ｱ)　アンケート質問項目

(１　ご勤務されている校種を以下の選択肢より選んでください。A　小学校　B　中学校　C　高等学校)
２　本日の謡の実技で一番おもしろいと感じた部分を簡潔にご記入ください。
３　今後、音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか。具体的にご記入ください。
４　その他　本講座に対して、ご意見等ありましたらご記入ください。

(ｲ) アンケート回答結果（16名回収/受講者20名）

〇勤務校種：小学校１名、中学校12名、高等学校３名

〇受講報告書と同ソフトによるアンケート設問２～４のテキストマイニング

マイニングソフト（UserLocal AIテキストマイニング・スコア順）

(ｳ) アンケート設問の出現内訳

設問２：謡の実技で一番おもしろいと感じた部分（複数回答）

㋐流派の違い、流派の特徴等　４件

・宝生流の謡い方の特徴（高等学校）

・流派によって、音の高さなどが違うこと（中学校）

・宝生流の優雅さを知ることができたこと（中学校）
・流派の違いを感じたこと（中学校）

㋑謡の旋律の抑揚　４件
・謡いの抑揚（中学校）
・音程の上がり下がり（中学校）
・謡の旋律（中学校）
・謡の音程（中学校）

㋒タブレット（GarageBand）による創作　４件
・GarageBandを活用した音(リズム)の重なり（中学校）
・タブレットを活用した活動（中学校）
・タブレットでお囃子をつくったこと（中学校）
・創作（高等学校）

㋓謡のリズム　　３件
・謡のリズム（中学校、高等学校）
・Garage Bandを活用した音(リズム)の重なり（中学校）

㋔ツヨ吟とヨワ吟　　３件
・ヨワ吟とツヨ吟の違いの謡い分け（中学校）
・謡については、授業で何度も実践しているがツヨ吟やヨワ吟などＤＶＤなどではあまり分かりにくいニュアンスなど、講師の先生のご指導のもと実習できて楽しかった（中学校）
・ツヨ吟ヨワ吟などの特徴（中学校）

㋕グループ連吟の発表　２件
・グループの創作の発表（中学校）
・連吟の発表（高等学校）

㋖歌ってみること　１件
・実際に自分で声を出して歌ってみることができたこと（小学校）

設問３：今後、音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか。（複数回答）

㋐タブレット（GarageBand）の創作　10件
・タブレットを用いての創作（中学校）
・タブレットの活用と共有（中学校）
・GarageBandの活用と表現（謡）（中学校）
・GarageBandを使いながら、謡も入れて発表してみたい（中学校）
・タブレットを活用した活動（中学校）
・お囃子は口で歌ったり手足でリズムをとるなどが生徒たちとのグループ学習だったが、本日のタブレットを使った実習は、生徒たちの伝統芸能への興味の第一歩として活用してみたい（中学校）
・創作も含めて様々な題材にも工夫して取り入れたい（中学校）
・謡を何度も練習して、タブレットでお囃子を作り、お囃子と謡をみんなで歌う（中学校）

・iPadの活用（高等学校）
・GarageBandでお囃子を作ってみる部分（高等学校）

㋑謡　９件

・GarageBandの活用と表現（謡）（中学校）
・GarageBandを使いながら、謡も入れて発表してみたい（中学校）
・謡い（中学校）
・自分がやってみて良かったと思える実技（小学校）
・間違っても大きな声で謡うこと（中学校）
・ごまぶし・くりぶし、謡に親しむ（高等学校）
・謡を何度も練習して、タブレットでお囃子を作り、お囃子に合わせて謡をみんなで歌う（中学校）
・「敦盛」を謡ってみよう（中学校）
・歌唱の実践（中学校）

設問４：その他 本講座に対してご意見等ありましたらご記入ください。８件

・本物の謡が聴けて教えてもらえたことは本当に貴重な機会だった（中学校）
・実際に授業で活用できることが出来てありがたかった（中学校）
・本場の先生に謡の指導をしていただき、楽しかった
生徒にも楽しさを伝えられる授業をしていきたい
ありがとうございました（中学校）
・講師の先生の発声がとても良かった/声楽出身の私がいうのもなんですが、直接能楽師の先生から謡を学ぶことができてためになった（中学校）
・本当に貴重な研修の機会だった/ありがとうございました（高等学校）
・能楽を通して、様々なことを考えることが出来た/もう２学期が目の前で 出来ればここから今日の講座の内容を噛み砕き、授業に活かしていける様にワークシートなども工夫したいが､明日から校内研修などでバタバタが続く/出来れば夏休みの前半に講座があれば嬉しい（中学校）
・非常に有意義な時間だった/ありがとうございました（高等学校）

(2) 令和６年度中高音楽「能の節を謡ってみよう＆タブレットでお囃子を創ろう」講座の概要

①日時：令和６年８月８日（木）10時30分～17時00分
②会場：京都府総合教育センター北部研修所　音楽実習室及び大研修室
③講座のねらい：能「羽衣」や「敦盛」の謡の実技とタブレット端末による囃子創作実技を通して、能の授業デザインを考える。
④講師：能楽師　山﨑　芙紗子氏（京都先端科学大学人文学部　特任教授）
⑤受講者：12名（中学校８名、特別支援学校１名、高等学校３名）
⑥研修内容

ア　実習Ⅰ（10:30～12:00）「タブレットで能のお囃子を創ろう」
内容：タブレットを活用した能「敦盛」「羽衣」の囃子の創作

イ　実習Ⅱ（13：00～15:00）「能『敦盛』と『羽衣』を謡ってみよう」
内容：能「敦盛」「羽衣」の謡と仕舞の実技

ウ　演習（15:15～16:00）「能『敦盛』を授業デザインしよう」

内容：能「敦盛」「羽衣」を教材とした題材構成演習

エ　実習Ⅲ（16:00～16:30）「連吟の楽しみを感受しよう」

内容：能「敦盛」「羽衣」の謡と仕舞の実技のまとめ

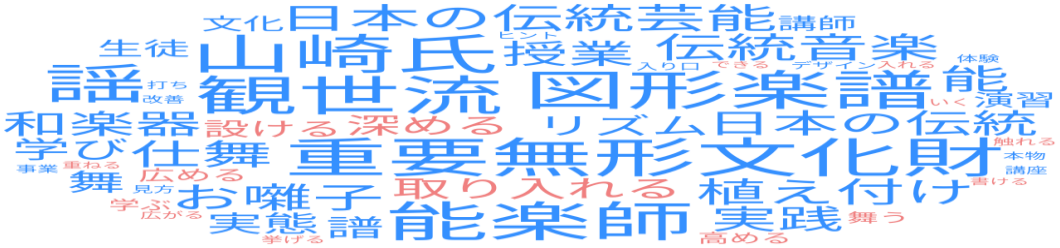
⑦受講報告書及びアンケート分析

ア　令和６年度受講報告書（12名：中学校８名、特別支援学校１名、高等学校３名）

(ｱ) 受講報告書の活用リード文

３　本講座内容のうち、今後の教育実践に役立てたり、勤務校で広めたりしようと思うことを記入してください。

(ｲ) 受講報告書のテキストマイニング



マイニングソフト（UserLocal AIテキストマイニング・スコア順）

(ｳ) 出現内訳

㋐授業デザイン　６件

・能の授業デザインにはもう一度自分でもゆっくり考えていきたい

・演習で考えた授業デザインを授業実践し改善しつつ、地域の先生方にも広めたい

・演習で出た授業実践や授業改善のヒントをもとに、学校の授業を展開させていきたい

・授業プランを考える際に挙げた図形楽譜をオリジナルで作るというのは実際にやってみたい

・日本の伝統芸能に触れる入り口をどのようにデザインするかが重要であり単に鑑賞させるのではなく体験を通して実感をもった理解を高めることを意識した授業づくりにしていきたい

・固定概念を捨て、面白い角度の見方を見つけられるようにしたい

㋑仕舞　３件

・曲を聞くだけでなく舞を少しでも取り入れる方が楽しい授業になりそうな気がした

・謡だけではなく、お話や仕舞など自分の視野が広がった

・生徒の前で舞うことはできませんが、映像を見ながら少し解説をしてあげられるかなと思った

㋒リズムに関する学習　３件

・特にお囃子のリズム打ちは必ず授業で実践したい

・和楽器のリズム譜も簡単に書けるのでやってみたい

・伝統音楽の授業は力を入れられていないので、実際にやってみるという内容でリズムを叩いたり歌ってみたりする学習を取り入れたい

㋓タブレット打ち込み　１件

・タブレットを使ってパートのトラックを作り重ねることはすぐにでも実践できそうだなと思った

㋔その他

・知識の植え付けだけにならないよう楽しく学ばせたい

・さらに自分の学びももっと深めていきたいと感じた

・生徒にとって遠い存在の能を少しでも近いものにできるようこれからがんばりたい

・日本の伝統文化を学ぶ機会は、支援学校にもあるべきだと思った/実態に合わせて文化を体験できる場を設けていこうと思った

イ　令和６年度　Formsアンケート(回答12名)

(ｱ) アンケート質問項目

(１ ご勤務されている校種を以下の選択肢より選んでください。A 小学校　B 中学校　C 高等学校)
２ 本日の謡の実技で一番おもしろいと感じた部分を簡潔にご記入ください。
３ 今後、音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか。具体的にご記入ください。
４ その他　本講座に対して、ご意見等ありましたらご記入ください。

(ｲ) アンケート回答結果（12名回収/受講者12名）

○勤務校種：12名（中学校８名、特別支援学校１名、高等学校３名）

○受講報告書と同ソフトによるアンケート設問２～４のテキストマイニング

マイニングソフト（UserLocal AIテキストマイニング・スコア順）

(ｳ) 出現内訳

設問２：謡の実技で一番おもしろいと感じた部分（複数回答）

㋐仕舞の体験　７件

・舞の動き（高等学校）

・先生と一緒に舞うことができたこと（中学校）

・仕舞（中学校）２名

・仕舞の体験（特別支援学校）

・舞を実際に舞ったこと

リズムや音楽を体で感じることができたことと能独特の繊細な動きや意味を知ることができ、ただ映像を見るだけでは分からないこと（感じられないこと）を経験することができた/能を身近に感じることができたのは大きな収穫だった（中学校）

・“浦風にたなびきたなびく”（羽衣)の所のように歌詞の意味合いを舞だけでなく謡でも表現される点（高等学校）

㋑リズムに関すること　４件

・お囃子のリズム打ち（中学校）
・リズムをタブレットで録音すること（中学校）
・囃子を叩いてみる（高等学校）
・リズムや音楽を体で感じることができたこと（中学校）
㋒能の授業デザインを考えるところ　１件（中学校）
㋓実際に活動できたこと　１件（中学校）
設問３：今後、音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか。（複数回答）
㋐タブレット（GarageBand）のお囃子の打ち込み　８件
・リズムをタブレットで録音してトラックを重ねること（中学校）
・GarageBandに打ち込みして音楽を分析する（中学校）
・お囃子のリズムの学習（高等学校）
・お囃子をタブレットに打ち込む（中学校）
・お囃子のリズム（中学校）
・タブレットの活用の方法（中学校）
・創作（中学校）
・囃子をアンサンブル（高等学校）
㋑謡　６件
・謡を歌って日本の音楽の特徴に気付かせる（中学校）
・声の出し方（中学校）
・謡の実技指導に活用したい（高等学校）
・映像を見せながら一緒に謡ったり踊ったりすること（中学校）
・謡と囃子を練習し、歌唱表現・器楽表現としてグループごとに発表（高等学校）
・謡ってみる（高等学校）
㋒仕舞　３件
・仕舞の一部（中学校）
・映像を見せながら一緒に謡ったり踊ったりすること（中学校）
・足拍子（中学校）
㋓授業デザイン２件
・先生方みんなで考えた授業デザイン（中学校）
・能の文化、評価の観点や取っかかり等多くの部分が活用できると思った（特別支援学校）
㋔その他
・活用するところまでまだできていない（中学校）
設問４：その他 本講座に対してご意見等ありましたらご記入ください。（11件）
・自分の中で視野がかなり広がりました。もう一度じっくり能の授業について考えてみたい貴重な機会だった（中学校）
・実際に仕舞をしたり謡を声に出してやってみることで能に対するハードルが下がり、生徒にどのように日本音楽の良さを伝えるかが具体化した(中学校)

・体も動かしながら楽しく学ぶことができた（中学校）
・タブレットを全員持参しているのでグループ討議にロイロなどを使用して、発表も前に映してやれば時短やわかりやすさに繋がるのでは…と思った/あと、能の授業実践講座も受講したい（中学校）
・日本の伝統音楽を教師自身が親しんでいくことが大切で、大変参考になる内容容だった（高等学校）
・山崎先生の講座をまた希望する（中学校）
・とても有意義な時間だった/ もっと自分自身の学びを深めるためにまた講座を受講したい（中学校）
・とても楽しく能について学ぶことができた（特別支援学校）
・どうしてもタブレットが苦手で、できる気がしない（中学校）
・楽しく受講できた（中学校）
・講師の先生が女性で親しみやすかったのでとてもよかった（高等学校）

(3) 令和５年度と令和６年度の受講報告書（３　今後の教育実践への活用）の比較

①　第１順位の比較

令和５年度の実践への活用に関する出現内訳の第１順位はタブレット端末やiPadに関する記述であり、GarageBandの活用を含めると11件の記入があった。令和６年度のタブレット端末への打ち込みに関する記入は１件であった。一方、令和６年度の第１順位は授業デザインの６件であった。この結果を受けて、以下のことを考えた。

ア　令和５年度と令和６年度の連続受講者の活用意欲の変化

今年度の受講者の中で２年連続の受講者が12名中６名おり、昨年度講座で既にタブレット端末を使った囃子音楽の打ち込み編集を経験しており、伝統音楽分野でのＩＣＴ活用が、伝統音楽への難解なイメージを身近で楽しいイメージに変化させる効果については、既に昨年度のＩＣＴ実習で理解され、昨年度の活用意欲につながったが、今年度講座のＩＣＴ活用は同じ実技内容のため新規内容の授業デザインや仕舞に活用意欲が変化したのではないかと考える。

イ　授業デザイン演習による受講者のアイデア交流の成果

今年度、講座内容に新たに加えた授業デザイン演習では、受講者から生徒による謡の絵譜の作成や囃子の器楽合奏等、さまざまな視点からの授業アイデアが交流され、新たな発見があったことが活用意欲につながったと考える。演習は１時間の短い時間だったので、講座中はもっとやりたいという声もあった。

さらに、授業デザイン演習が第１順位であったことから、音楽科の授業で能をどのように取り扱えばよいのかについての困難さがあると考えられる。

②　第２順位以降の比較

令和５年度の講座内容が謡の実習とタブレット端末での囃子音楽創作、創作音源を伴奏としたグループ連吟という内容であったので、第２順位以降も我が国の伝統音楽指導に関する記述や謡の節回しに関する記述が多かった。一方、令和６年度は令和５年度の講座内容に仕舞と授業デザインを加えたので新しい内容に活用意欲が高まったのではないかと考える。また、令和５年度は楽譜を見て直接、囃子音楽を端末に打ち込んだが、令和６年度は端末に打ち込む前のステップとして、能「敦盛」と「羽衣」の囃子を口唱歌や打楽器を使ったアンサ

ンブルによってリズムを確認した後にタブレット端末への打ち込み作業を行ったため、第２順位は仕舞及びリズムに関する学習という結果になったと考えられる。

(4) 令和５年度と令和６年度のFormsアンケート結果の比較

① 一番おもしろいと感じた部分

【令和５年度】

㋐流派の違い、流派の特徴による謡い方のちがい　４件

㋑謡の旋律の抑揚（謡の抑揚 ・音程の上がり下がり）４件

㋒タブレット（GarageBand）による創作　４件

【令和６年度】

㋐仕舞の体験　７件

㋑リズムに関すること　４件

アンケートの第２設問の「謡の実技で一番おもしろいと感じた部分」の問いに対して、令和５年度と令和６年度は回答に差があった。問いの文章は、令和５年度と同じく「謡の実技で一番おもしろいと感じた部分」であったが、結果として令和５年度は、令和４年度講座講師の観世流の謡い方と令和５年度講座講師の宝生流の謡い方の違いや宝生流のダイナミックな抑揚等が第１順位に見られた。一方、令和６年度は、謡の実技内での仕舞の体験が第１順位となった。

これらの結果は(3)で述べたように、令和６年度講座で、仕舞体験が初めての受講者が多く、仕舞の実技が興味深かった結果ではないかと考える。

② 音楽科授業での活用

㋐タブレット端末を使ったお囃子打ち込み（令和５年度：10件/６年度：８件）

㋑謡の実技指導（令和５年度：９件/６年度：６件）

アンケートの第３設問の「音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか」の問いに対して、令和５年度と令和６年度は同じ傾向が見られた。

この結果から、アンケートの第２設問「謡の実技で面白いと感じた内容」と第３設問「授業への活用意欲」の回答について相関関係がないことが分かった。特に、令和６年度の第２設問「面白いと感じた内容」の第１順位は仕舞体験７件であったが、第３設問「活用意欲」の問いに対して仕舞体験に関する回答は３件であった。

これらの結果から、能を授業で取り扱う際にＩＣＴ活用や謡の実技は活用しやすいことが考えられるが、授業への仕舞の活用意欲は高くないことが読み取れる。

上記アンケート回答から、仕舞は受講者にとって興味深い活動であり、仕舞と謡を一体的に実技課題として設定すると能の理解が深まることについて、受講者が体験的に理解したことが報告書やアンケートから読み取れたが、音楽科の教科書は主として謡と囃子の音楽実技を扱っているため、音楽科授業で謡の実技にどのように仕舞を加えるかについて、授業者が課題を感じたと考えられる。このことから次年度講座では、音楽科授業において生徒が謡と仕舞を一体的に捉え、気付きを書き込むワークシートを提案したいと考える。

(5) 受講報告書の活用の記述とFormsアンケートの活用の回答に関する回答の相関性

令和５年度は両方の第１順位がタブレット端末やGarageBandの活用に関する記述及び回答だったので相関関係が認められた。

令和６年度の受講報告書の第１順位は授業デザイン演習に関する内容であるが、アンケー

トの第１順位はタブレット端末やGarageBandの活用に関する回答であったため、令和６年度は受講報告書の記述とアンケートの回答との相関関係は認められなかった。
原因として、受講報告書のリード文「３　本講座内容のうち、今後の教育実践に役立てたり、勤務校で広めたりしようと思うことを記入してください。」の設問の文章がアンケートの音楽科授業への活用のについてのみの狭義の質問ではないことに起因しているかもしれない。しかし両講座において、タブレット端末の活用に関する回答は共に多かったので伝統音楽の分野においても受講者のＩＣＴ活用に対する関心が高いと考えられる。

４ 能を教材とした授業デザインと題材を貫く問いの例

前述の当センター講座の受講報告書やアンケート結果から、引き続き、生徒の実態に合わせた授業デザインの提案が必要と考える。次年度講座においても受講者同士が協働的に考え合う授業デザイン演習を企画したい。なお、以下の能を教材とした歌唱・器楽分野のデザイン例及び能と歌舞伎を関連させた鑑賞の授業デザイン例について、次年度講座でも提案し、受講者の授業デザインの豊かな発想へのきっかけとしたい。

(1) 歌唱分野の授業デザイン例（対象：中学校第３学年）

①題材「我が国の伝統的な歌唱に親しもう」
②主教材　　能「敦盛」
③補助教材　民謡「刈り干し切り歌」（宮崎県）、大相撲の呼び出し
④題材を貫く問い　我が国の伝統的な歌い方の特徴は何か
⑤ねらい　　能「敦盛」のキリの地謡、追分様式の民謡や大相撲の呼び出しの歌唱活動を通して、我が国の伝統的な歌唱の特徴を理解し伝統的な歌唱に親しむ
⑥指導内容　第２学年及び第３学年　Ａ表現 (1)歌唱
　イ（知識）(ｲ) 声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりを理解すること
　〔共通事項〕(1)
　生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：声の音色、旋律
⑦発展的な学習　我が国の伝統的な歌唱の特徴と日本語のリズムとの関連を見つけよう
⑧学習指導要領が示す我が国の伝統的な歌唱の特徴
“我が国の伝統的な歌唱とは、我が国の各地域で歌い継がれている仕事歌や盆踊歌などの民謡、歌舞伎における長唄、能楽における謡曲、文楽における義太夫節、三味線や箏などの楽器を伴う地歌・箏曲など、我が国や郷土の伝統音楽における歌唱を意味している。教材の選択に当たっては、例えば、発声の仕方や声の音色、コブシ、節回し、母音を延ばす産み字などに着目できるものを選択することが考えられることから今回の改訂では、従前示していた「声の特徴」に加え、歌い方の特徴を新たに示した”（中学校学習指導要領解説音楽編p.106～107）

(2) 器楽分野の授業デザイン例

①題材「能管の囃子音楽を奏でよう」（対象：中学校第３学年）
②主教材　能「羽衣」キリ
③題材を貫く問い 囃子の能管の旋律の特徴は何か

④ねらい　囃子音楽の能管の旋律のリコーダー奏を通して伝統的な音楽の特徴を考える。

⑤指導内容　第２学年及び第３学年　Ａ表現(2) 器楽

イ（知識）(ｲ) 楽器の音色や響きと奏法との関わりを理解すること

ウ（技能）(ｲ) 創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法、身体の使い方などの技能を身に付けること

〔共通事項〕(1)

生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：旋律、音色

(3) 鑑賞分野の授業デザイン例

①題材「能『敦盛』と歌舞伎『一谷（いちのたに）嫩（ふたば）軍記』を比べよう」（対象：中学校第３学年）

②主教材　能「敦盛」、歌舞伎「一谷嫩軍記」

③題材を貫く問い 能と歌舞伎の音楽表現の違いをみつけよう

④ねらい　能のシテ（主人公）の謡の発声と歌舞伎の熊谷次郎直実の発声の比較や能の囃子と歌舞伎の下座音楽の比較等から能と歌舞伎の共通性、固有性を考える。

⑤指導内容　第２学年及び第３学年　Ｂ鑑賞(1)鑑賞

ア（思考力、判断力、表現力）

(ｳ) 鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、音楽表現の共通性や固有性について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと

〔共通事項〕(1)

生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：声の音色、テクスチュア

5 我が国の伝統的な歌唱の理解を深める他教科とつながるカリキュラム・マネジメント

能を含む我が国の伝統音楽の理解を深めるために、伝統的な歌唱を中心として他教科をつなぐカリキュラム・マネジメント例も提示したいと考えた。

(1) 七五調のリズムに親しむための国語科との関連

小学校歌唱共通教材（24曲）及び中学校歌唱共通教材（７曲）は、七五調の歌詞が多く、意識せず自然に歌っている場合が多い。この七五調のリズムは和歌に見られるリズムである。能の謡の詞章は、「万葉集」「古今和歌集」「和漢朗詠集」等の和歌や漢詩を引用して詞章に入れられており、和歌や漢詩に親しむことは能の理解にもつながる。例えば、能「敦盛」の後半に後シテ・敦盛が武装して登場して謡い出す場面で、「淡路潟　通ふ千鳥の聲聞けば寝覚めも須磨の　関守は誰そ」の源兼昌の和歌（「金葉和歌集」）からの引用が見られる。また、能「羽衣」は、「天つ風　雲の通い路吹き閉じよ　少女（ヲトメ）の姿　暫し留まりて」の古今集の僧正遍照の和歌からの引用のほか、拾遺集の詠み人知らずの歌「君が代は」、丹後風土記の羽衣伝説所引の歌「天の原」をはじめとして多くの和歌の引用が見られる。

このように、小学校から歌唱共通教材の七五調のリズムだけでなく、百人一首を始めとする身近な和歌を声にだして詠み、リズムに慣れ親しむことが、能の謡を含む伝統的な歌唱に興味をもつことにつながると考える。

さらに、日本語母音を生かした民謡のこぶしや能や長唄等の節回しは、伝統的な歌唱の特

徴であり、母音の響きを生かした音楽表現でもある。八木節様式の拍節的な民謡は、能「敦盛」の地歌「一門皆々」の出だしの歯切れのよいリズムにつながるが、地謡「のびたまふ」に見られる母音の延ばしやクリは我が国の伝統的な歌唱の特徴である。

このように、小学校低学年から国語科教材を音読して日本語の母音の美しさを感受し、中学年・高学年で和歌や我が国の古典に親しむことが音楽科の伝統的な歌唱のリズムや母音を伸ばす旋律の特徴を理解し、ひいては我が国の伝統文化を継承、発展、創造することにつながり、音楽科の学習が育成を目指す「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」につながるものになる。

(2) 能「敦盛」を中心として他教科とつながるカリキュラム・マネジメント

次年度から使用する中学校音楽科教科書２社共通の能の教材である「敦盛」について、以下で他教科とつながるカリキュラム・マネジメント案を提案したい。

①国語　ア　古典教材「平家物語」第九「敦盛の最後」
　　イ　浄瑠璃及び歌舞伎「一谷嫩軍記」より「組討ちの段」
　　ウ　幸若舞「敦盛」

②社会（歴史）ア　源平の合戦
　　イ　北山文化（観阿弥、世阿弥）
　　ウ　織田信長と幸若舞「敦盛」
　（地理）ア　一の谷と須磨浦公園（敦盛塚）
　　イ　須磨寺（敦盛公墓所、敦盛の鎧と兜、青葉の笛、一の谷合戦屏風絵他を所蔵）

③保健体育　仕舞の型や摺り足の足運びと武道（剣道、合気道等）との関連

④美術　　ア　「一の谷合戦図屏風」（東京富士美術館）、「源平合戦図屏風」（兵庫県立歴史博物館）
　　イ　能装束の伝統文様、和柄、平家紋（蝶）
　　ウ　我が国の伝統色
　　エ　能面
　　オ　小道具の色・形
　　カ　能舞台、舞台正面の松

⑤家庭科　能装束の伝統色（衣服・染色）、伝統文様、和柄、平家紋（蝶）

６　次年度講座に向けて

今年度講座は昨年度講座の課題を生かし、謡の実技とタブレット端末への囃子音楽の打ち込み編集の実技に、新たに仕舞の実技と授業デザイン演習を加えて実施した。今年度の講座のねらいは「能『羽衣』や『敦盛』の謡の実技とタブレット端末による囃子創作実技を通して、能の授業デザインを考える。」であり、謡の実技の中に仕舞を入れて実技を行った。今回の受講報告書及びFormsアンケートから、謡に仕舞を取り入れた実技によって受講者が詞章と所作（動き）の関連性を実感でき、能の理解につながることが確認することができた。また、それぞれの実技の後の授業デザインについても、受講者同士でさまざまなアイデアを出し合うことができたので、一定、講座のねらいを達成することはできたと考える。

しかし、音楽科教科書には仕舞についての記載がないので、授業で取り扱う際は、能楽師等

の外部講師に依頼するか、授業担当者が仕舞を教材化する方法が考えられる。

授業担当者が仕舞を教材化する場合、仕舞を教材としてスクリーンで仕舞の動画を流して、師範者と一緒に舞いながらポイントとなる所作の意味について生徒に発問し、意見を交流する等の授業展開が考えられる。

次年度講座においては、今年度講座でのＩＣＴ活用に関する内容を別講座（「小中高をつなぐ音楽科ＩＣＴ活用講座」）に分けることとし、能楽講座においては今年度に引き続き謡と仕舞の実技とグループでの授業デザイン演習を行うこととして企画する。さらに、今年度、仕舞の授業への活用意欲が少なかったことから、授業で謡と仕舞を関連させて取り扱う場面を想定し、生徒が謡の詞章に仕舞の所作のポイントやその意味を考えて書き込むワークシートを作成して次年度講座で提案し、受講者の活用意欲が高まるかどうかについて、アンケート結果で確認したい。

次年度は４年目の能楽講座となる。受講者が本講座をどのように音楽科授業で活用したかについての設問を入れたFormsアンケートを実施して授業での活用状況を調査し、能楽講座の成果と課題をまとめたい。

７　まとめ

伝統音楽分野において、能は授業担当者がどのように授業を展開するべきかについて困難を感じる教材の一つであることを、従前の当センター音楽科講座や初任者研修講座等で確認してきたが、本講座の実技や演習によってその魅力に気付き、授業構成のヒントを見出したことが受講報告書等から確認できた。

令和４年12月の中央教育審議会答申総論４(1)の「『新たな教師の学びの姿』の実現」として、教師の学びの姿と子どもたちの学びの姿の相似形が示されているように、教師が能動的に能の授業を構想し授業実践することによって、児童生徒の伝統音楽を継承、発展、創造する資質・能力が育まれると考えられる。

現行中学校学習指導要領解説（音楽編）の目標「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の解説部分には、“グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできるようになることも大切である。～（中略）～このような意味において、音楽文化についての理解を深めることは、本来、音楽科の重要なねらいであり、教科として音楽を学習する音楽科の性格を明確にするものである。”と示されている。

本研究によって、伝統音楽を扱う音楽科授業が教科目標が掲げる資質・能力の育成に資するものとなり、児童生徒が我が国の伝統文化に愛着をもち、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重できるようになるよう、さらに次年度講座によって研究を続けていきたい。

＜引用及び参考文献＞

・浅井ちとせ（2021)「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発」京都府総合教育センター研究紀要（第10集）0205.pdf

・浅井ちとせ（2022)「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発－我が国の伝統音楽とＩＣＴをつなぐ創作課題－」京都府総合教育センター研究紀要（第11集）303.pdf

・浅井ちとせ（2024)「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発－「能の謡のリズム」を中心として－」京都府総合教育センター研究紀要（第13集）0503.pdf
・石上則子、斎藤忠彦他（2021）「中学生の音楽２・３下」教育芸術社
・伊野義博、井上洋一他（2021)「中学音　２・３上」教育出版
・表章、加藤周一（1974)「世阿彌 禅竹」岩波新書
・二十四世観世左近(2020)観世流謡本特製一番本「敦盛」檜書店
・二十四世観世左近(2016)観世流謡本特製一番本「羽衣」檜書店
・野村四郎(2012)「仕舞入門講座」檜書店
・文部科学省（2017)「中学校学習指導要領解説音楽編」教育芸術社
・文部科学省（2018)「高等学校学習指導要領解説芸術(音楽美術工芸書道)編 音楽編 美術編」教育図書
・吉川英史、金田一春彦、小泉文夫、横道萬里雄他（1980)「邦楽百科事典　雅楽から民謡まで」音楽之友社